

ロバート・スミッソンの〈フローティング・アイランド〉について

アメリカのランドアートにおける環境と美術との接点に関する問題

富士栄 厚

私はすでにアメリカのランドアートの理論家であったロバート・スミッソン(1938-73)の環境彫刻〈スパイラルジェティー〉にまつわる螺旋の形態的な問題提起をし、同様に先駆者であり現存作家のマイケル・ハイザーの環境彫刻についても美術史と考古学との接点の問題点に関して言及した(『美学』192号、1998年、『美学』217号、2004年)。

今回は最近発表されたスミッソンの遺作〈フローティング・アイランド(マンハッタン島を周遊する浮き島)〉(1970/2005年)の再現による環境彫刻のもたらす問題を考察する。スミッソンはレオナルドのごとく多くの未完成の作品を有するが、このプロジェクトはスミッソンの素描(1970年)に残された未完成のアイデアを、彼の死後に現実化させた作品である。セントラルパークの土壌を、はしけに持ち込み、その上に根から引き抜かれた植物を移し、小さな庭園を再生させて一種の島を作り、これをタッグボートで引き回し、短期間限定してハドソン川縁に寄港し周遊させるものであった。マンハッタン島の高層ビル群とはしけの中の浮き島や庭園との円形の二重性が対照的であり、タッグボートが、はしけを引き回す様子とそれに対する観客の反応に諧謔的な儀式性があった。またこのプロジェクトはサイトワークとして美術館外で設置され、既存の美術の表現方法を乗り越えようとする環境彫刻の持つ限界と、暫定性の問題をも提起した。

スミッソンは島についての多くのプロジェクトを考え、場所のユートピア的性格について言及した。この点で島の原型になるユートピアとしての島のイコノロジーの分析が必要である。島のユートピアとしての歴史的な形態と意味合いは、例えば18世紀にモアーやカンパネーラの提起した問題であり、スミッソン作品のよって立つピクチャレスクで崇高な概念の起因する場所でもある(Ph.D. dissertation, Atsushi Fujie, “American Land Art and the notion of the picturesque and sublime,” University of Paris, 1993.)。それをひくボートはE・ホッパーの描く絵画にも登場する。

そしてまた、この〈フローティング・アイランド〉の「現在性」は、作品が見せる移動性と行為の暫定性、そして環境の再利用の問題にある。これは同時期の他のプロジェクトにも見られる特徴でもある。パナマ運河プロジェクト(素描/映画)(1970)で硫黄や海洋生物を、はしけによりヒューストン経由でバンクーバーまで運んだ行為は、今回の作品の移動性と諧謔的な儀式性に通じる。また〈フローティング・アイランド〉とマンハッタン島の巨大な高層ビルとの対照は、この後スミッソンがソルトレークの半島の先に突堤をしかけるといふ、荒廃した風景中に島のような逆螺旋形の環境彫刻による新風景を切り開き、ソルトレークの生態系を再生したことに通じる。最後に〈フローティング・アイランド〉の木々はセントラルパークに戻されたが、この自然の再利用による島は、水はけの問題を有し、水の浸食作用に対応できない。この崩壊感は作家の定義するエントロピーの概念に通じ、同様に自然環境の変化に対応する他の環境彫刻の記憶と保存の問題をも提起する。